国際金融教室

現代の国際金融・通貨問題を考え

安東盛人・土屋六郎 編

有斐閣選書

スミソニアン体制の崩壊から総フロート制への移行、オイル・マネーの累積による国際金融市場の変貌、IMFや国際通貨制度改革案などを盛りこんだ全面新版。歴史・理論・実務の三面にわたる詳細・最新のハンドブックです。

国際金融教室

現代の国際金融・通貨問題を考える

〔新　版〕

安東盛人・土屋六郎 編

有斐閣選書

編者紹介

安東盛人（あんどう もりと）

大正6年大分県に生まれる。昭和17年東京大学経済学部卒業。横浜正金銀行に入行，東京銀行取締役・外国総務部長，常務取締役を経て，現在，同行監査役。経済学博士。著書に『外国為替概論』（有斐閣）がある。

土屋六郎（つちや ろくろう）

大正15年長野県に生まれる。昭和24年中央大学経済学部卒業。現在，中央大学経済学部教授。この間，経済研所長・経済学部長を歴任。経済学博士。主要著・訳書に『国際経済学概論』（春秋社），『国際収支の構造と変動』（新評論），『国際金融の構造と理論』（日本評論社），ヌルクセ『後進諸国の資本形成』（巌松堂）等がある。

国際金融教室 ＜新版＞ ＜有斐閣選書＞

昭和47年7月20日 初版第1刷発行
昭和51年4月20日 新版初版第1刷発行
昭和54年3月30日 新版初版第5刷発行

¥1,300

編者 安東盛人 土屋六郎

発行者 江草忠允

発行所 株式会社 有斐閣

東京都千代田区神田神保町2-17
電話 東京（264）1311（大代表）
郵便番号〔101〕振替口座東京6-370番
本郷支店〔113〕文京区東京大学正門前
京都支店〔606〕左京区田中門前町44

印刷 堀内印刷 製本 稲村製本

© 1976, 安東盛人・土屋六郎・Printed in Japan.
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

1333-080345-8611

新版のはしがき

国際金融・通貨問題は「国際収支問題にはじまり国際収支問題におわる」ともいえる。戦後の大きな収支問題としては、一九四〇年代のドル不足、六〇年代以降におけるドル不安の原因となったアメリカからのドルの流出、そして最近におけるオイル・マネーの蓄積などがあげられる。これらはいずれも国際経済全般に深刻な影響を及ぼした例である。このように、国際収支の不均衡が国際的に大きく、広く、構造的であればあるほど、国際金融・通貨面に及ぼす影響は大きく、国際経済の安定と発展のために機能すべき国際通貨制度や金融機構を動揺させ、遂には崩壊に至らしめる。

本書がその第Ⅰ章に「国際収支」をテーマとして採り上げたのは、そのような配慮からである。この章では、「国際収支」についての必要な知識が、田中教授によって体系的・具体的に解説される。もちろん、その他の各章においても、それぞれのテーマを通して国際収支問題とのかかわり合いは採り上げられるが。

ところで、国際資金移動はいわゆる外国為替によって行なわれ、そのための金融は国際金融市場が舞台である。外国為替と国際金融市場のメカニズムに関する知識は、国際金融・通貨問題に取り組む場合の必須の武器である。第Ⅱ章で「外国為替・貿易金融」が、

第Ⅲ章で「国際金融・資本市場」が、木村教授によって、実務・理論の両面から解説される。

なお、国際金融・通貨問題を考え理解する上で、金本位制とＩＭＦ体制は欠くことのできない重要研究テーマである。それは単に過去のものではなく、将来にもつながる問題である。前者については第Ⅳ章Ａで、金本位制の本質とその歴史的な発生・展開・崩壊の過程が、安井教授によって解説される。後者は第Ⅳ章Ｂで、則武教授の担当であるが、複雑で難解とされているＩＭＦ体制の本質にメスが入れられ、誕生から崩壊に至るまでのドラマがその本質との関連において解説される。

第Ⅴ章は、前章のあとをうけて、戦後における「国際通貨制度の動揺と変貌」を実証的に体系づけたもので、土屋が担当している。読者は、錯綜した戦後の国際金融現象が、どのような背景からどのような力関係のからみ合いの中で展開されていったかを、本章から学びとることができよう。

第Ⅵ章の「国際通貨制度改革の理想と現実」は、将来への展望をテーマとしたものである。エール大学へ研究留学への出発直前に大宮教授がまとめられたもので、通貨制度改革の理想と現実のギャップを明らかにし、現実的な将来への展望を示している。

最終の「オイル・マネーと国際通貨問題」と題する第Ⅶ章は、とくに今回の新版に新しく追加された章で、安東が担当した。国際通貨制度改革を挫折させ、国際金融市場を激変させた、オイル・ショックとオイル・マネーの意味と実態を、将来の展望をふくめて解明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

した。

ところでこの『国際金融教室』の旧版が刊行されたのは、一九七二年（昭和四七年）七月、つまりスミソニアン体制発足（円切上げ）後まもなくであった。その後の変転はまことに著しく、そのだめ押しとなったのが、オイル・ショックであった。そのため本書は、当初改訂版にとどめるつもりであったのを、全面的な新版に切り換えた次第である。

旧版は、一般読者のほか、大学や研修所などのテキストにもひろく使用されたと聞く。今回新版に改めるについては、最終ゲラの段階まで、必要な新しい事態に対応させる努力が払われた。「高く正確な水準の内容をできるだけ平明に」という執筆者共通の念願がどのていど果たされたかは読者の厳正な御批判を俟たなければならないが、本書がハンディで有用な国際金融の体系的な解説書として読者に活用していただけるならば、執筆者一同のささやかな苦労は報いられて余りあるといわねばならない。最後に、旧版に続き新版もまた有斐閣編集部の池淵昌氏に御尽力いただいたことを記して謝意を表したい。

一九七六年二月

編　者

目　次

I　国際収支

（田中喜助）

†ドル・ポンド・円など各国の為替相場や国際金融の動向はそれぞれの国の国際収支状況によって左右される。その統計的な捉え方を学ぼう。

1　国際収支とは何か（2）
2　国際連盟方式からＩＭＦ方式へ（5）
3　ＩＭＦ方式の国際収支表（原表）（8）
4　わが国の国際収支表（国内発表形式）（11）
5　経常収支にはどのような項目があるか（15）
6　資本収支にはどのような項目があるか（20）
7　金融勘定の諸項目（25）

8　国際収支の赤字・黒字とその判断基準（29）
9　国際収支調整政策（36）
10　わが国の国際収支（39）
11　主要国の国際収支（43）
12　わが国の国際貸借表（47）

II　外国為替・貿易金融

（木村　滋）

†国際資金移動は外国為替によって行なわれる。外国為替に関する基礎知識を、貿易手続や貿易金融、外国為替理論と一体化して総合的に理解しよう。

13　外国為替の意義と起源（52）
14　外国為替のしくみ（56）
15　外国為替の種類（62）
16　信用状、為替手形、船積書類（66）
17　為替相場の基礎知識（72）

18 わが国の為替相場 (78)
19 資金操作と持高操作 (85)
20 為替裁定、金利裁定、為替投機 (89)
21 貿易金融 (93)
22 為替および貿易に関する管理 (100)
23 為替学説(ゴッシェン、カッセル、アフタリオンの説) (110)
24 新しい外国為替の理論 (113)

III 国際金融・資本市場

(木村 滋)

†世界中に張りめぐらされた国際取引は、国際金融・資本市場で決済され、資金も調達される。通貨不安の引金である短資もここで活躍する。

25 ニューヨークの金融・為替市場 (126)
26 ロンドンの金融・為替市場 (131)
27 ヨーロッパ大陸および東京の為替市場 (137)

28 ユーロ市場 (141)

IV－A 金本位制

（安井孝治）

†国際通貨の歴史は金本位制をめぐる歴史でもあった。イギリスに始まり世界を支配したこの制度の成立と変貌の跡を探ってみよう。

29 金本位制度の意味とその歴史 (152)
30 金本位制度はどのような機能をもっているか (156)
31 第一次大戦後成立した金為替本位制度 (161)
32 金本位制度崩壊の過程 (164)
33 通貨ブロックの成立とその限界 (167)
34 金本位制崩壊後の為替相場安定策——為替安定資金—— (170)
35 為替清算制度とは何か (173)

Ⅳ-B　IMF体制

（則武保夫）

†IMFは金とドルで結ばれた国際通貨体制であり、戦後の通貨と為替の安定に役立ったが、ニクソン声明をきっかけに大きく変化している。

36　IMFはどのようにして成立したか（178）
37　IMF体制（ブレトン・ウッズ体制）は金・ドル本位制であった（181）
38　基金原理と銀行原理のちがいについて（184）
39　IMF体制と金本位制との本質的ちがいは何か（186）
40　IMFの仕組みと機能（189）
41　IMF加盟国の通貨の平価とその変更（192）
42　固定為替相場制と自由変動為替相場制のちがい（194）
43　現代における金の役割は何か（197）
44　自由金市場とその機能（200）
45　SDRが創設された背景と理由（202）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

46 SDR――その価値と性格――（205）
47 国際流動性――その内容と性格――（209）
48 国際通貨協力はどのように発展してきたか（211）
49 IMFと発展途上国（214）
50 世界銀行の設立の目的とその機能（216）
51 キングストンの合意とIMF協定の変更（219）

V　国際通貨制度の動揺と変貌

†金・ドル本位制の崩壊、スミソニアン合意による国際通貨制度の再建とその失敗、総フロート制への移行、という激動の原因と歴史を探ろう。

（土屋六郎）

52 戦後の国際通貨制度は金・ドル本位制であった（224）
53 ドルが弱体化した背景（227）
54 アメリカのドル防衛策の展開（232）
55 国際流動性の供給と流動性ディレンマ論（235）

56 通貨不安はどのようにして起こったか (237)
57 イギリス経済の弱体化とポンド不安 (242)
58 ゴールド・ラッシュ——金への投機はなぜ生じたか—— (244)
59 マルクの切上げとフランの切下げ (247)
60 ブレトン・ウッズ体制の終焉——ニクソン・ショック—— (249)
61 スミソニアン体制の誕生と崩壊 (252)
62 世界的なインフレーションの進行 (256)
63 激動した円 (263)
64 総フロート時代の出現 (268)

VI 国際通貨制度改革の理想と現実

(大宮 俔一)

†通貨不安の原因である国際的な不均衡や為替相場の不安定さを除く方策を中心とするIMFの通貨制度改革案の大要とその問題点を明らかにする。

65 通貨改革の流れと問題点 (274)

66 意図された通貨改革の方向――『国際通貨制度改革の概要』――（277）
67 総フロート、石油危機と通貨改革（280）

Ⅶ オイル・マネーと国際通貨問題

（安東盛人）

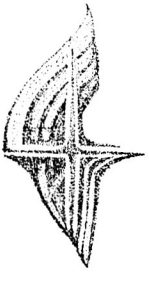
†IMF体制と高度成長を挫折させたオイル・ショックの本質と実態は何か。オイル・マネーの形成と還流と将来の問題点を分析する。

68 オイル・ショックの与えた影響（284）
69 石油――そのウェイト、消費量、生産量、埋蔵量――（289）
70 原油価格の形成（295）
71 オイル・マネーの形成（300）
72 オイル・マネーの累積（309）
73 オイル・マネーの還流（314）
74 オイル・マネーとギャップ金融（322）
75 オイル・ショックとスタグフレーションおよび通貨改革（331）

参考文献……(343)
国際金融・通貨年表……巻末10
索　引……巻末1

I 国際収支

現在、新しい国際通貨秩序形成への歩みが進められ、いかなる決済制度が国際収支の効果的かつ均斉のとれた調整に有効かが重要な論題として検討されている。それは、国際通貨問題がつねに各国の国際収支状況と密接な関係をもっているためにほかならない。収支状況を把握する統計として国際収支表がある。これは国民所得統計とともに、その国の内外経済活動をみる重要な経済指標であり、また国際通貨問題を理解するための基本データでもある。本章では、まず、国際収支表が対外取引をどのような原則と形式でとらえているか、つまりその仕組みについて詳説する。さらに、収支不均衡とその調整、また、石油価格引上げにともなう主要国の収支パターンの変化を分析する。



1　国際収支とは何か

▼国際収支は国際間における収入と支出の関係　国際間において経済取引が行なわれると、国際間に貸借関係（債権・債務関係）、つまり国際貸借が生ずる。国際経済取引の結果として国際貸借が発生すると、その決済のために国際間に資金移動が生ずる。たとえば商品取引の場合には、商品の移動と反対の方向に資金の移動が生ずる。しかし、資金の移動といっても、実際に各国の通貨が国境をこえて移動し、国際取引の決済を行なうということは、きわめて例外的にしかおこりえない。それは、現金の移動にともなう手数・費用・危険の負担が大きいこと、また、国により貨幣制度が相違（たとえば、イギリスはポンド、西ドイツはドイツ・マルクというように）しており、一国の通貨は他国において通用しえないためである。したがって、国際間の資金移動は主として外国為替によって行なわれる。

国際貸借の決済は主として外国為替によって行なわれる。したがって、国際取引の最終的な結果として国際間では外国為替による資金の移動が生ずる。この資金移動には、一国の国境をこえて、外から内にむかう移動と内から外にむかう移動とがある。前者の場合には収入（流入）、後者の場合には支出（流出）となってあらわれる。このような国際貸借の決済のために生じた資金移動の結果は、国際間における収入と支出との関係、つまり国際収支として示される。

▼国際収支は二つの意味をもつ　収支関係は、一定期間における関係としてのみとらえうるものである。たとえば、家計の収支（家計簿）は、毎日の収入と支出との関係を記録し、一定期間（通常、一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.